

East 探しに

第一日目

April 16 2009

実は先週がグッドフライディで、三連休だったのですが、月、火曜日とビジネスプランのミーティングをやるということで、長い休みがとれず、一週間遅れでこのドライブを計画。この旅の目的は、これまでのドライブの軌跡を見れば、誰でも当然と思われるような



ところを走り回ることにした。つまり、アメリカドライブで残された場所の北東部を走ってみようというわけだ。ニューヨークに森谷君がいるし、日本に帰るとなれば、一度会いに行かなくてはの思いがある。そして、やっぱり、なんとしてもナイアガラは一度は見ておかなくては。それと、どうせ行くな

これがいつものスタイルです。

なく、アメリカ大陸の端の行き着けるところまでということで、例の「赤毛のアン」の小説の舞台とな

った、Prince Edwards Island まで、いってしまえということになった。もっと日にちがあれば、たっぷりカナダをドライブしてくるつもりだが、日にちに限りがあるので、ここは自重。とにかく、10 日間で、ゆったり、しかも、中身の濃いドライブにしようと選んだコース。

今日は、その一日目。移動日である。リンカーンからオマハ、デモイネをとおり、イリノイとアイオワの州堺のまち Davenport、この町、川の対岸は Moline という町になっているが、ここを抜け、イリノイの真ん中当たりにある Peoria という町までのドライブ。とにかくネブラスカからは、アメリカのどこに行くにしても、一日は忍耐のいる移動日を覚悟しなければならない。ということで、今日はひたすら、I-80 を東に向かって走りに、走った。いつもの長旅は、先をあせっても仕方がないので、の



アイオワの風車

んびり、制限速度プラス 5miles ルールでノンビリ運転。ところが、今日はやたらとスピード違反で捕まっている車を見た。多分、パトカーが一斉取締りをやっているのだろう。あちこちでつかまっている。挙句の果ては、ニュートンという町の近くでは、反対車線で事

故を起こしていた。インターステーツが長い渋滞をするほどだから、かなり派手にやったようだ。じつは、その前にハイウェイを走っていたら、私の車のかなり後ろのほうで、パトカーがサイレンを鳴らし、とランプをちかちかさせながら、猛烈な勢いを追いかけてきた。さすがにこのときは、如何に五マイルオーバーを守っていたといっても、自分ひとりが追い越し車線を走っていたものでから、またしても「しまった。やられたか」の気分。仕方なく、スピードを落とし、走行車線に入り、走っていたら、このパトカー、スピード



Rock Island への橋

を緩めず、突っ走っていった。それから、しばらくの間は、一体誰が捕まるのか、半ば楽しみにこのパトカーの行く先を一生懸命追いかけていたが、結局は、見失ってしまった。何のことはない、このパトカー、スピード違反を追いかけていたのではなく、その事故の現場に戻るところだったというわけだ。人騒がせにもほどがある。

アイオアの丁度真ん中あたりを東西に走っている、インターステーツ I-80 は、なにしろ、広大な平野

をただま
っすぐに

走っているような道路。気持ちがいいというより、単純そのもの。そんなドライブをしていると少しでも変わったものがあれば、とにかく目に付く。毎日見慣れている天気図では、この当たりの気候はたいへん穏やか。そのせいか、途中で見かけた風車もなんとなくおとなしい感じがした。この州の州都は、まさしく州のど真ん中にある Des Moines という町。ここで、南北に走るインタース



Peoria から イリノイ川を望む

テーツと交差している。そして、この町の近くには、例のさすらいのカメラマン、ロバート・キンケイドとフランチェスカのロマンスをテーマにした「マディソン郡の橋」がある。



Peoria でみた住宅。贅沢

この日の予定は、そのアイオアを横切り、Davenport そして、ミシシッピー川を挟んでこの町の対岸になっている Rock Island までゆき、そこからイリノイを南にはしり、Peoria という町までいく。この Peoria という町、その名前がなかなかハイカラだ。ミシガンから流れ出た、Illinoi 川がこのあたりで大きな川幅の流れになっていて、その川岸にできた町。

この日の行程が移動だけのためかなり長い旅路になったが、夕方、町について、すこし無理をし、町の中心街まで足を伸ばした。ナビが案内してくれた的の中心部は、行政の中心部というところか。ここが、高台の上になっていて、ここからイリノイ川が一望できるところであった。驚いたことにこのあたりにあった建物が、これが見事な館ばかり。官舎にでもなっているのか、とても個人のものとは思えないような立派な家がずらりとならんでいた。

なぜ、East に行ったかって、それは、この旅の最後の報告の中で、お楽しみに。

この日の行程は

Lincoln ----> Omaha ----> Des Moines -----> Davenport ----> Galesburg ----> Peoria

487 miles でした

East 探しに

第二日目

April 17 2009

実質、この日が一日目ですが、出発はペオリアから。まっすぐ懐かしのインディアナへ。州境を超えたとたんに **Terrehaute** なんていう名前が見えてくると本当に五年前にここにいたことがとても懐かしく感じられました。せっかくインディアナポリスを通るわけなので、前に一度行ったことがあるが、スピードウェイをもう一度覗いてみることにした。ここにはミュージアムがあるはず。予定より早く着いたのでちょっとだけ覗いてみようというわけ。ゲートのとなりの建物に入ったら、ここは、ミュージアムではなく、チケットの売り



インディアナポリス・スピードウェイ

場。でも、この日たくさんの人がこのチケット売り場に並んでいた。これはなにか催しものがあるのだろうと思ったが、確認することはしなかった。ここで、ミュージアムはどこかとたずねたら、ワンプロック先だという。というわけで、気を取り直し少し外れたところにそれらしき入り口があり、ここに入って行った。と、なんと、そこはスピードウェイのスタジアムの中。ミュージアムがあれかと思って駐車場に車を止め、ドアを開いたら、なんと、スタンドには人はいないが、ナスガ

ーのあの猛烈な爆音が聞こえるではないか。そのものすごい音だ。何台も連ねて NAS カーが走っているというわけではなかったが、二・三台ずつ追いつ追われつの走りをしている。流石に目の前で見ると車の走り、その迫力ものすごい。じつは、この日は金曜日ということで、本レースのラップを取っていたのではないと思う。チケット売りにたくさんの人がいたのはそのためではないか。ミュージアムに来て、こんな光景までみることができたなんて、これ最高。というわけで、いい気持ちでミュージアムのなかにはいる。ここには、これまでのレースで優勝した車がところ狭しと展示されている。



往年の勇姿を披露

古いものはどの時代のものだろうか、それにしても貫禄のある車がずらり。近くには昔のオートバイも展示されており、かつてはここでオートバイレースも行われていたということか。時間が限られていたので一通りの見学と写真を取り、早々、引き上げる。そして、ここからは、Cincinnati に向かう。この町はすでに、オハイオだ。インディアナにいたときに一度きたことがあるが、そのときには右も左もわからず、ただここを通り過ぎただけ



オハイオ川を背に

だったが、今度は、町のダウンタウンまでゆき、この町の歴史を垣間見ることができた。この町は、オハイオ川の流域にあり、州のはずれにある町と這いえ、その繁盛振りはなかなかたいしたもの。ここから、川沿いのドライブシーニックウェイ 52 号に入るが、この道、ハイウェイ 275 号からの入り口が通行止め。おかげでかなりの大回りとなったが、それでも、何とかナビのおかげで、予定のオハイオ川にそった道を走ることができた。

ダムあたりに

アメリカのこうした大きい川には、ダムがある。川の流れは、水量こそ、延々と遠いところから流れてきているので、とても豊か。その推量を利用した水力発電だ。ダムの名前は、Cap. Anthony Meldahl Lock & Dam とある。ただ、あまり水位の差がないので、どれだけの発電がされているのかは定かではない。それと、こうしたダムは洪水対策として推量の調整をする意味もある。こんなダムは、また、アメリカ人の憩いの場にもなっている。どこも公園になっていて、また子供たちには発電の仕組みを解説するようなツアーもある。こんなところにこの国のゆとりを感じるのである。



Westwood の街角で

オハイオ川の川沿いに走っていると、やがて Huntington への案内板が出てくる。そこはすでにウェストバージニアだ。なんの間違いか、ひとつ前の交差点で、川を渡ってしまったが、この町がまた由緒ありそうな町。Westwood の町の建物は古めかしく、川の輸送船の陸揚げ地として繁栄していたのではないかと思う。狭い町であったが、間違えたついでに町なかを一回りし、再び、Huntington へと向かう。さすがにこの日の行程はかなり長いものになってしまい、この日の宿泊地の Charleston までは、まだかなりある。西日を背に受けてのドライブは景色が映える。カウンティハイウェイは時間がかかるのでここはおとなしく、インターステーツ 64 号線を走ることにした。このあたりから景色はすこしずつ山の切



通しを走る形になる。ここが昔からの交通の要衝であることが分かる。そして、無事、この日のドライブを終了。

とうとう来ましたこの橋を渡れば

West Virginia です

この日の行程

Peoria	---	Bloomington	---	Champaign	---	Danville	---
Indianapolis	---	Harrison	---	Cincinnati	---	Aberdeen	---
Portsmouth	---	Huntington	---	Charleston			

走った距離は、553 Miles でした。

East 探しに

第三日目

April 18 2009

Charleston から Baltimore

Charleston は、山の中にある町という感じでしたが、なんとまあ、ここが、ウェストバージニアの州都だったんです。ハイウェイを走っていたら突然立派なキャピタルハウスが見えてきました。例のホワイトハウスをまねたものですが、また、どうしてここが州都になったのかは、とても興味のあるところ。



Kanawah 川にあったダム

もともとこのアパラチアには、チェロキーのインディアンが住んでいたのは、昨年、フロリダへのドライブで、スモーキー・マウンテンを走ったときに紹介された。チェロキーがこの土地を追われたのは、ここに鉄鉱石がでたからだ。ところが、ここがアメリカの自然の偉大なところ。鉄鉱石がでても、これから製鉄を実施するためには、石炭が必要なのである。その石炭がここにはたくさん埋蔵されている。チェロキーの伝説のなかに、黒い土の話がある。

その土は火がつくのだ。かれらは、その土を顔料に使っていた。まさかこれが産業近代化の立役者になるなどとは微塵にも気がつかなかった。これを知っていた西洋人は、かれらに、農耕のために肥沃な土地オクラホマを提供するというので、移住を強制した。これが、「涙の街道」といわれるスモーキーマウンテンからオクラホマまでの街道なのである。一部のチェロキーは、この命令に抵抗し、先祖代々の土地に居残りをしたが、その生活は西洋人に虐げられたものだったそうだ。そんな歴史を思い起こさせるこの Charleston の町の朝の光景であった。

Blue ridge highway

Charleston からバージニアに向かったが目的は、ここにある山並みハイウェイを走ること。森谷君が、数日前に、このスカイラインがとても



Blue ridge highway 気分最高

も素敵だと連絡してくてくれた。かなりの期待を持って、このハイウェイに行く。そこに

行くには、少し距離は遠くなるがターンパイクを突っ走るコースと、時間が読めないがオハイオ川に注ぐ、**Kanawha** 川沿いに走るシーニックコースとがある。ハイウェイは、ありきたりの景色になるので、ここは、思い切って少々時間のロスを覚悟で、シーニックドライブウェイに挑戦した。川沿いの道は曲がりくねり、上り下りがあるが、さすがに川の見ながらの朝のドライブは快適。途中にやはり、スチームを黙々と吐き出している工場があった。こんなところにも歴史のある産業があったのだ。早朝とは言え、時々覆面パトカーに出くわし、ドキっとして冷や汗を書きながらスピードメーターを除いて、安心したり、不幸にも、パトカーに捕まった車を横に見ながら、「お気の毒に」と同情したりしながら、しばらく自然を楽しむ。そして、インターステーツ 64 に出ると、しばらく走れば、もうそこはバージニア州だ。言わずと知れた、ここは、



ご機嫌状態

ヨーロッパ人にはアメリカ発祥の地でもあり、首都ワシントン DC はこの州の中にある。アメリカに来て、四年が経つがはじめてこの州に来た事にひとしおの感慨を覚える。しかし、創造したようにここは、山の中だった。あの、西部の広々としたアメリカの大地からすれば、そこは、なんとなく狭い国土の日本の景色とあまり変わらない。だから、余計、これがアメリカだと思われては心外だとの思いがわいてくる。ネブラスカなんて、こんなちやちな景色ではない、というわけである。インターステーツ 81 との合流地点に **Lexington** という町がある。なぜ、このハイウェイが 81 なのかというのも気に掛かるが、ここより少し南にいったところに、**Buena Vista** という町があり、ここから **Blue Ridge Highway** に入る。



Shenandoah National Park からの展望

様子はなかなかのものでした。

このハイウェイは、この北にある **Shenandoah National Park** の中を走る **Appalachian Trail Skyline Driv.** につながる山並ハイウェイ。これがまた、すばらしい。山脈の尾根伝いにできたハイウェイでとにかく両側の見晴らしの利く。道の脇の木々には、まだ新芽は芽吹いてはいなかったが、木枝の隙間を通して見る青空、というより、青空を背景に力強く枝を伸ばした木々というのがびったりかもしれないが、ここから眺める下界の

この **Appalachian highway** は、ナショナルパークになっていて、とにかくそのたくさんの人ではびっくり。場所は、大都市に近く、こちらの人にとってはとても人気のある山並ハイウェイです。ただ、この日が土曜日ということもあり、家族ずれで楽しみに来ている人たち。とくに、ここをトレッキングするグループの数がすごかった。格好のレクリエーションの場所なんでしょう。もちろん、こんなところで自然を楽しんでいるのは、白人しかいない。これがアメリカの社会の現実なのだとすることを痛切に感じた次第です。そんなことに思いをめぐらしながら走っていたら、突然、前の車がキューブレーキ。危ないだろうと思わず声がでたが、これが、実は、鹿の親子が飛び出てきての急停止。反対車線の車も徐行をしている。鹿さん危険じゃないですか。でも、鹿をはねるわけには行かない。こんなに人手があるのに、平然と鹿が出てくるのは、鹿がいかにかたくさんいるかということ。でも、ここの住人としては鹿のほうが先なんだよね。



人気者、**Ranger** のおばさん

例によりナショナルセンターにはビジターセンターというのがあります。ここによるのが楽しみ。というのは、こうしたビジターセンターはただ単なる情報の提供だけでなく、学術研究員という人たちがいて、自然の保護もすることながら、ここで自然のなかの動物たちの生態を研究したり、自然の営みの観察をしており、これらのひとが暖かく迎えてくれるからです。この日も、駐車場に車を止め、カメラを片手にこのセンターの入り口に行くと、あのりりしい印象の帽子をかぶり、人懐っこく、笑顔で迎えてくれた女性がいた。「おっ、これは絶好のチャンス。」と、写真を撮ってもらう。頼もうといたら、これが以外とかなりのご年配のご婦人が、ここで、みんなに笑顔を振りまいているのである。これには、ついうれしくなって、この人の写真まで撮らせてもらった。楽しいね、こんなことが旅の醍醐味なんです。そして、中にはいれば、この職員たちが生き生きとした表情で、みんなに、大自然の楽しみ方を説明していた。と、そんななかに、子供づれのお母さんが、カウンターで、「この子を、ジュニアレンジャーのプログラムに参加させたいのだけど、」とたずねていた。こちらでは、ナショナルパークには、こうした個人で参加できる、自然体験教室とでもいうようなプログラムが用意されている。自然に興味のある子供たちは、一人でも積極的にこうしたものに参加して、やがてのそのうちの何人かが、プロとして活躍するようになるのであろう。その長期的な教育のプログラムこそ、世界に通用するようなプロを育成するのに必要なことなのではないかと思う。これもアメリカのゆとりなのか、それとも、教育というものに対する基本的な考え方になにか違ったものがあるのか、いずれにしても、日本でもぜひとも取り入れてほしいようなシステムである。

ワシントン DC

ナショナルパークに別れを告げると、そこからは、半時間くらいで、ワシントン DC につく。まあ、とにかく道路の込んでいることには、緊張の連続。そうしたら、道路の標識を見ていたら、ペンタゴンへの案内などでている。



車、車、車。ここに車で知らなかったこの混みよう。

とにかく、ホワイトハウスは雑踏の中にあるという感じ。テレビで放映されているあの開放的な感じのホワイトハウスとは全く印象が違う。確かに、ものすごい広さの公園がホワイトハウスの前に広がっているが、ここにいる人の数の多いこと、そして、東京などと戸同じように、雑然とただ、ただ、がやがやと動いている感じ。それでも、ここまで来たのだから、何とか証拠写真が欲しいと、エマージェンシー用の空いていた場所に車を止めで、とにかく写真をとる。

そして、その公園のまわりにスミソニアンがたくさん博物館が並んで建っている。有名な航空博物館か、アメリカ・インディアン博物館によるつもりでいたが、初めての者には、どれがどれだかさっぱりわからない。駐車場はないし、一方通行のどうろでは、ただぐるぐる回っているだけ。まるでハツカネズミの状態だ。スミソニアン博物館も、もう人ごみのなかでは断念せざるを得ない。こういうところは自家用車でくるようなところではないのだ。よくわかりました。

ポトマック川のほとりに

このままでは、消化不足と、それならポトマックリバーのほとりに行こうということで、気を取り直し、このホワイトハウスの前の公園に一番端まで車を走らせた。そこが公園になっていることはわかるが、駐車のできるのは反対車線だけ。これでまた、U-ターンをするのに一苦労。なにしろ、こんなところでは下手に U-ターンをして、違反で捕まったら偉いこと。仕方なく、しばらく車を走らせて、何とか U-ターン。こんな状態だから



なんてったって、**White house**。

時間がやたらと経過する。そして、車が何十台とならんで道路わきに、前に駐車していた車が出る準備をしているので、ここで順番待ちをする。しかし、その車が出た後のスペースは決して十分なものではなく、ここに無理

やりに押し込む。切り替えし 10 回はしたね。やっとの思いで車を入れたから、これで安心して一休みできる。ポトマックリバーのほとりでまず記念撮影。なかに、この桜並木、こ



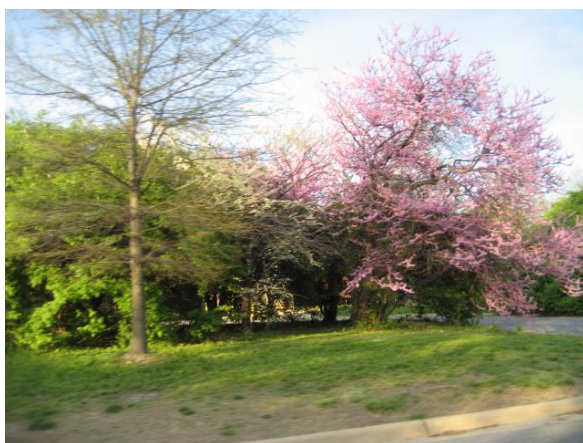
この桜はもう既に散っていたが、公園の中ほどにあるものは、今が満開であった。まあ、こんな情景でしょう。ふと見れば、この土手で昼ねをしている人。かなり本格的に寝込んでいる。この騒音の中でも熟睡しているのだからたいしたものだ。どんなわけでもここで寝ているのか、ここで寝る意味があるのかわからないが、しかし、それにしても贅沢ですね。夕方になり、椅子持参で散歩に来ている人もいた。ここで、読書

をはじめたのだ。何もここでなくともという気もしたが、これがなかなか絵になるんですね。

Potomac River

いい時間になったので、ボルチモアのモーテルに向かう。車で 30 分ほどで行き着くはずであったが、これまた車の渋滞に巻き込まれた。しばらくは走ったり、止まったりであったが、半時間ほどで渋滞を切り抜けることができた。どうも、反対車線で車の接触事故があったようだ。それにしても、向きが反対になり、それも、中央分離帯を乗り越えそうなどころまで来ていたのだから、これは、かなり激しい接触をしたのではないかと思う。

というわけで、ここでもまた余分な時間を食ってしまった。時間に余裕がなく、何とか無事、ホテルにたどり着けるようにとナビを頼りにはしったのだが、これが、また、どういうわけかが、ナビが間違えてとんでもないところにたどり着いた。指定した番地が見つからず、別の場所に案内された。でも、ストリートの名前はちゃんと認識しているから、そこから程遠くないところにホテルはあるだろうと、なら、その近くまで行けば何とかなるだろうと考えていたのが、大間違い。車が入って言った街角は、なんと、ドヤ街。黒人たちが住んでいる、安アパートが延々と続くとおり。ここで、



Potomac Park の桜。見事

目的地についたといわれても、ホテルらしきものなど一向に見当たらない。もう、あたりは真っ暗になった。こんな心細いことはない。ふと見れば、道路が閉鎖されている。なんと、パトカーが道を閉ざしているのである。そして、そのパトカーの前には、手錠をかけ

られた黒人がなにやらが成り立てている。そんなどやがいに入る。「えらいこっちゃ、こんなところでトラブルに巻き込まれたら、」と思いながらも、さて、いったいここからどこをめがけて走ればよいのか、しばし、思案にくれる。そういえば、なんとなく、インターステーツの 70 号とハイウェイ 695 号の交差あたりだと記憶していた。うろ覚えではあるが、とにかく、そこまで行ってみるかの気持ちで、ナビに入力。それがまた、たいへん。ナビはここに不慣れなドライバーなどということは少しも眼中になく、最短距離で案内してくれる。挙句の果て、まるでこの都会にして森林の中を走る始末。昼間であれば閑静な住宅街といったところであろうが、周り真っ暗。一体、大丈夫なのかと思いながら走っていたら、何とかハイウェイにのることができた。でも、方角もわからずに走っている。ランプに取り掛かり道なりに走っていくと、ふと横をみれば、そこにモーター街のネオンがいくつか見えた。「占めた。あのあたりにゆけばなんとかなるだろう。」直感。そうなり、次の出口で降りて、見失わないうちに元に戻ろうと思うのだが、これがまた、意地悪。行けども行けども出口がないのだ。結局数マイル走って次の出口。ここで、ハイウェイを降りて、すぐに、近くのガソリンスタンドにより、そこから確認の電話をするが、やっぱり番地を確認できない。これは、もう、体当たりで行くしかない。したの道を先ほどのモーター街を目指して戻る。こうして、何とか近くまでたどり着けば、あとは、ネオンを目指して何とか行き着くことができる、というのがこちらの仕組みだ。こんな具合で、とんだ時間を費やしたが、無事、この日の宿泊のモーターにつく。大都会の割には安いと思って予約を入れた、Best Western のモーター。これが、また、できたばかりのモーター。とてもきれいなモーターで気分は最高だ。反省は、ナビがこうした新しい建物の情報を持っていなかったこと。つまり、ナビのアップデートをもっとこまめにしておかなくてはならないということ。この事象、この旅の間中感じた反省だ。

この日の行程

Charleston ---→ Montgomery ---→ White Sulphur Springs ----→ Lexington
---→ Buena Vista ---→ Blue Ridge Highway ---→ Shenandoah National Park
---→ Warrenton ---→ Washington DC ----→ Baltimore (泊)

この日の走行距離は、476 miles でした。

East 探しに

第四日目

April 19 2009

Baltimore から New York

森谷君が、`95 号線はなかなか素晴らしいハイウェイと紹介してくれた。なるほど、はいえいの両脇には、延々と街路樹というより、森林が続いている。その季節、秋になれば素晴らしい紅葉を楽しみながらドライブができるだろう。Baltimore から New York までのこの日のドライブであるが、バージニアから、ニューヨークまでのハイウェイは、Maryland, Delaware, New Jersey, Pennsylvania と、途中、四つも州を横切ることになる。いずれの州も、感覚的にはかするだけになるので、いずれかの州に寄り道を考えた。その結果、New



New Jersey に入る橋

Jersey の海岸線を走るシーニックドライブウェイに挑戦することにした。このあたり、その昔、ヨーロッパからの移住のための上陸地として栄えた地域だ。ものの本によれば、この地は、イタリアからの移住がはじめてだという。重要な拠点には要塞がある。

Pennsylvania の Wilmington という町で、インターステーツから一旦おりて、Bridgeton, Millville などという町を通過。シーニックコー

スは途中が通行止めになっていた。海岸まで、一時間程度で着くかと思ったが、これがなかなか時間が掛かる。入り組んだ、海岸線の道路は、実際の距離以上に時間が掛かるということだ。そこで思い切り、コースを短絡。

そして、ついに大西洋の海岸に到着。すこし海は荒れていましたが、潮風は紛れも泣く、海の方こうヨーロッパの匂いを感じさせてくれる雰囲気がありました。この海を渡ってヨーロッパ人たちがアメリカ大陸に



あちこちにこの枝垂桜が咲いていた

来たのは、今から数百年前のこと。アメリカの歴史は、その程度しかないなんて誰が信ず

るのかと不思議な気さえする。心地よい、すこしだけ肌には冷たい感じのする海の風をうけて、浜辺にそってできた町をどらいぶ。この町は、ちょうど海の大きな砂州にできたようなもので、。しかも、よくもここに町ができていたねと言いたくなるほど、松林など全くなく、潮風の吹きさらし。全く、人口のものしかないというのが正直なところ。しかし、



良くできたいたデッキ風の散歩道

ハイカラなのは、海岸沿いにできた自然の土手に沿って、延々とデッキ風の散歩道ができている。だれがこんなものを作ろうと発想するのかと感心するほど、良くできている。ここを散歩する老夫婦がいるかと思えば、気持ちよくジョギングしている人がいたね。こんなところでジョギングができるなんて最高だろうね。こんな散歩道をつくったその発想に、粋だねと思った次第。

せっかく海辺に来たのだからと、波打ち際まで足を運ぶ。遠くの方から、仲良く肩を並べて散歩している中年の夫婦が来た。誰もいない砂浜を二人静かに散歩している。どんな会話をしているのだろうか、なんて推察するのは野暮のすること。どうぞ、二人でお楽しみください。ここをそそくさと引き上げる。が、こんなことをしていたので、意外と時間が掛ったぞと、反省。予定では、ここからこの海岸沿いに百マイル近く走るつもりでいたが、とにかく、同じ距離を進むにも、このあたりは西部の場合と比べて倍かかる勘定。そんなことから海岸沿いに作られたターンパイクをニューヨーク向かうことにした。ターンパイクのありがたいのは、信号がまったくないこと。そこで、ついついスピードが出てしまう。でも、これだけ車がつながっていると、少々スピードを出しても、パトカーが入り込む隙間がない。それなら、少々スピード違反は大丈夫、だろうと勝手に解釈。こうして、時間を大分稼ぐことができたが、でも、まあ、無事だったからよいでしょう。

せ



そうです、これが Atlantic の海岸です

ニューヨークに入るなら、95 号線がいいよとの情報があつたので、この道を走ることにしたが、都会のハイウェイは、斜線の数も多いうえに、やたらとランプが次々と出てくる。地図で方角を覚え、そして、ハイウェイの番号も確認しながら走るが、車の数が異常と思えるほど多く、しかも、どの車も車間距離が極めて短い。そんな状態だから、緊張この上なしの状態、いよいよニューヨークに入る。頼りになるのはナビだけ。そのナビにどのように目的地を入力するかが大事なポイント。がとにかく無事、Statue of Liberty の公園



女神とともに

ので、特異のカウボーイハットで写真をとることはできませんでしたが、それでも女神の銅像の写真はたっぷり撮りました。しかし、どこに、何時行っても中国人の観光客が絶えないね。ここでも、たくさんの中国人家族の観光客を見ることができました。やっぱり、負けているね、彼らのたくましさには。

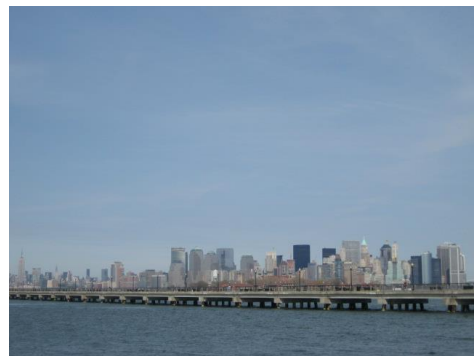
森谷君には、五時半ごろにいくと連絡してあった。そろそろいい時間なので、帰ろうと車を動かし、もう一度、違った角度から女神の像を見よう、この公園のなかを走る。と、船にのって女神の銅像まで行く人たちのために、広い駐車場があった。勿論、無料。ところが気持ちよくパーキングに入れたら、なんと、出口から逆に侵入していた。しかも、その直前にパトカーがそこから出てきていたのだから、ク

ワバラクワバラ。ここからは、女神はすこし遠くなったが、マンハッタンの摩天楼は目と鼻の先しか離れていない。これがまたすばらしい迫力。この一角に、何万人、否、何十万人の人たちが仕事をしている。その大都会ニューヨークの活力が伝わってくる。その摩天楼を背景のご機嫌の写真を撮り、ニューヨークの下町に繰り出す。森谷君にマンションに行くには、マンハッタンに入らなければならない。



流石。マンハッタン

に入ることができた。と、見えました、見えました。あるではないですか、あれこそ自由の女神です。ご存知のように女神の銅像の建っているところは島になっているので、船に乗らなければならない。時間的に余裕がなくなってきたので、これは断念。が、銅像はでかいし、遠くからみてもその迫力は十分感じることができる。マンハッタンのビルの林を背景にした女神の銅像は、これこそ、ここの守り神の威容を誇っている。ウォーターフロントでもあるし、また、この日は風も強かった



すげえー。マンハッタン

それが、まあ、とにかく道路が混んでいる。でも、ナビのおかげ。どれが自分の信号かわからないような交差点も難なくクリアー。ありがたい。それにしても、マンハッタンに入るジョージ・ワシントンの橋は、ここを渡るのに 30 分かった。この橋は、有料の橋。例によりカード支払いの車と、そして、三人以上の人が乗った車には専用のレーンがあり、こちらは比較的スイスイと進んでいたが、一人ドライ

バーだけのレーンはなかなか進まないのだ。しかも、それまで、青信号で進んでいたゲートが突然占められ、そうすると、レーンを変えなければならない車が出てきて、こんな調子でいつも混んでいるらしい。

こうして、マンハッタンから 87 号線に入り、ハドソン川の川沿いに彼のマンションのあるブロードウェイ通りに入る。ナビは、目検討で入力してあったが、それでも、0.5 マイルほど行過ぎはしたものの、無事、彼のマンションを探し出すことができた。こうして、三年ぶりになるかな、森谷君のマンションに到着。懐かしい、歴史と由緒のあるマンションに一晩お世話になることにした。予定より随分遅れてしまったが、夕方、娘さんも来て、四人で巻き寿司三

昧。刺身がおいしかったね。ネブラスカでは、トロなんて、でてくるものは疲れているようなものばかり。ここのトロの違うね。舌が蕩けるほどおいしかった。話に花が咲き、なんと、娘さんはニューヨークマラソンで新聞に載るほどの立派な成績あげたとか。上位三パーセントに入っているの、ボストンマラソンにも出ることがでぎるのだそうです。そのボストンに明日すくことにしていると云ったら、ちょうど、明日はボストンマラソンがあるのよ、と説明してくれた。まさか・・・、それが、事実ならこんなラッキーな話はない。



George Washington 橋



森谷君のマンションからハドソン川

なにしろ、彼のマンションの部屋からは、ハドソン川の流れを眺めることができる。高級なレストランでさえ、なかなか難しいその雰囲気。こんな気持ちで食べる食事は最高。贅沢この上無し。満足、満足でした。

食事のあと、森谷くんが孤軍奮闘でがんばって、やっと収穫ができるようになったという家庭菜園を見に、散歩にでかける。広大なマンションの敷地の一角にある、ハドソン川に面した斜面にあった。このあたり、森林も多

いせいか、収穫のまえに野菜が野生の動物に先取りされて、ほとんどの人が一年で諦めてしまうらしい。彼は、苦心して柵をめぐらし、自己防衛。そして、たまねぎやら、イチゴやら、トマトなどを栽培しているという。このアメリカの大地で野菜を栽培するとはたいしたもの。これは絵になる。是非、これからも立派な菜園を続けてもらいたいものだ。

ニュージャージーを走っているときに、たくさんの枝垂桜を見て、びっくりしたと話したら、このあたり、樹齢何十年もの立派な枝垂桜があちこちになるとのこと。この家庭菜園の近くにも、かれらが夫婦で楽しんでいるテニスクラブのコーチがやはり記念に植えた枝垂桜が見事な枝ぶりで花を咲かせていた。ソメイヨシノや八重桜などもたくさん見ることができたが、やはり、花の咲きぶりの見事さは枝垂桜に一日の長があるのではないか。

こうして、この日はアメリカの大都会を走り、とにかく、ネブラスカと違うその車の動きに、いつもとは違う運転に気を使い、ぐったりという感じで、シャワーも浴びずにベッドに。

この日の行程

Baltimore ---> Wilmington ---> Pennsville ---> Salem ---> Hancocks
Bridge ---> Marlboro ---> Bridgton ----> Cedarville ---> Newport
----> Buckshutem ---> Dennisville ---> Avalon ---> Odean City -->
Pleasantville ---> Edison --> New York

走行距離は、3 4 8 miles でした。

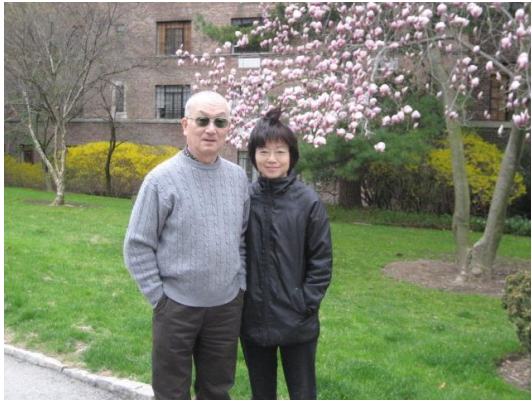
East 探しに

第五日目

April 20 2009

New York から、Maine 州まで。

昨日は、森谷くん夫妻と意気投合、アメリカ談義に花が咲き、ついつい時間のたつのを忘れるほどでした。長いドライブの疲れもあり、シャワーも浴びずにベッドに入ってしまったが、この日は、ちょっとだけひんやりした朝の空気に快適な目覚め。シャワーを浴



お世話になった森谷夫妻。E 線です。

の森林が見事だ。こんなところは、秋の紅葉の時期にすれば、最高だろうと思う。ニューヨークから北にかけての海岸は、比較的早い時期にヨーロッパの人たちが入植した土地が延々と続いている。でも、彼らは、最初はもっと南のバージニアに入植したのだが、ここにはヨーロッパ人は生活の基盤を築くことができず、結局は失敗に終わったとのこと。そのかわり、ニューヨークから北の海岸線は、ヨーロッパに気候風土が似ているためか、それともそのほかの要素があって、こちらの入植はうまくいったとのこと。そんな町の代表が **Providence** であり、**Boston** なのだ。というわけで、このあたりの町はどこもヨーロッパの風情と、やたらと立派な教会が目につく。とりわけ、**Providence** なかなかのいい町でした。

びて行動開始。彼らと一緒に食事をしたが、森谷君は、今でもお米のご飯を食べているとのこと。私は、もう、何十年も、朝はパンにしている。これにコーヒーがあれば、もう十分。話足りない、心残りがあり、近い将来、ぜひもう一度家内同伴でくるようにとのお誘いまでうけ、このすばらしいマンションの雰囲気についつい、その気になってしまう。そんな、贅沢を感じさせて暮れる彼のマンションを後に、ニューヨークからニューヘーブンに向かう。このあたりのハイウェイも両脇



Boston の摩天楼

Boston

そして、この日の最大の目的だった美術館訪問の **Boston** に。ただ、残念なことにこの日は月曜日で美術館がお休み。残念、悔しいの思い。でも、それは、またの機会にして、今日は、ゆっくり街中見物をしようと気を取りなおす。森谷くんの話しでは、**Boston** には、ハーバードや MIT もあるらしい。そこで、急遽、このアメリカを代表する名門の大学を訪



Boston の Down Town で

ねてみることにした。その前にといい、ダウンタウンの中心地まで足を運び、そこから、車を走らせようとした。が、とにかく、町が大きく、ナビを頼りのドライブでも、ついつい、道を見



違え、余計な時間がかかる。田舎者にはなかなかつらいものがあります。

大都会で、車がビルの谷間に入るとナビが、サテライトを拾えず、と出てくる。下調べを良くしていけば問題ないのですが、これがなかなか手ごわい。そんなわけで、ダウンタウンはものすごい高層ビルのなかで道に迷う。ウロチョロしていて、突然パトカーにばったりなんていうことがあるから、神経をぴりぴりさせながら走る。



そして、アメリカの名門大学ハーバードと、さらに、理系学生の憧れの的 MIT も近くにあるというのでここを目指す。できれば、門の中に入りたかったが、それがまた、町のごちゃごちゃしたとおりにキャンパスがある。歴史のある大学だから、立派な門に広大なキャンパスを想像していたものだから、簡単にわかるだろうと思っていたのが大間違い。道を聞いて、あれが

そうだといわれても、なかなか、納得の建物が見つからず何度も同じ場所をぐるぐるまわる。最後に諦めて、じゃー、仕方がない、ボストンととおさらばするかと高速に乗る前に

ガソリンスタンドに入り、もう一度、念のために聞いたら、この道をまっすぐ行った、すぐそこあるという。ここまで探したのだから、なら、よし時間はないけどもう一度と挑戦というわけ。そして、やっとのこと、三角交差点になったところに大きな建物を見つける。大きなキャンパスを想像していただけに、拍子抜けの感じ。こちらは、見た目は狭くても中身の濃い学問ができるのだということがよく分る。広大なキャンパスを持った大学は田舎にいけばいくらでもあるが、こんなこじんまりした大学でも、中身は世界の研究ができるということを思うと、やはり、学問は外観ではなく、学問に対する歴史と姿勢が違うのだということを改めて感じた。



Harvard University の新しい建物

ハーバードを探して。なかなか見つからず。何のことはない。街中にこじんまりという感じの大学。近くには、MIT もありましたとの一幕でした。

さて、その後は、わずかながら、**New Hampshire** の海岸を突っ切り、アメリカの北東の端、**Maine** 州に入り海岸沿い **US-1** を走る。フロリダでも、1号線を走ったし、この1号線を走るということにこだわりをもったドライブだから、ここまできて、してやっтарいの



橋を渡るたびに新しい州に。**Maine** 州

気分。**Cameron** あたりから、海岸線がちらほら。しかし、それにしても立派な家ばかり。どうして、と思うが、これがこの地の歴史なのだろう。この地域はアメリカでも比較的ヨーロッパに近いということか、とても歴史を感じさせるような風景がどこまでも続く。

Portland もかなり大きな町であるが、東に向かっていているということもあり、同じ時間にして

は、まわりに夜の帳を感じる。かなり時間を食っているようだ。そして、やっとのことこの地

の宿泊地の **Bucksport** に到着。ここは、決して大きな町ではないが、次の日の行程と、この町の近くにある **National Park** の **Acadia** までの距離を考えて選んだ。案の定、ナビは、モーターの住所を読み取れていない。立ち寄ったガソリンスタンドのカウンターで、モーターの名前を言ったら、これは、すぐこの先にそのモーターがあると説明してくれた。助かったとの思い。こんな調子で、八時にモーターに到着。

その Bucksport のモーテルのカウンターで、名前を言ったら、すぐに日本人かという。ネブラスカにも行ったことのあるという東洋人で、このあたりには、日本人がよく来ると言う。理由は、木材のチップを生産している工場がたくさんありこのため日本から製紙会社がくるのだという。先日もに日本で一番大きな会社 came が来たが、名前はなんというのだと聞いてきた。王子、本州、大日本などいろいろ言ったが、どれも違うという。そのうち、同僚に電話で確認したら、どうもそれは日本の会社ではなかったようだ。

このモーテルで確保してくれた宿、これが、この日に開業だという。これまではシーズンオフのため使っていなかったのだという。そのため、エアコンが使えず、にわか電氣ヒーターを貸してくれたが、これが、この日は結構、寒い日。とても、寝巻き一枚では寒くて耐えられず、仕方なく、もう一枚着込んでベッドに入る。まいったぜ。でも、良く眠ることができました。

この日の行程

New York ---→ New Heaven ---→ Providence ---→ Boston ---→ Portland
---→ Bucksport

この日の走行距離 479 miles でした。

East 探しに

第六日目

April 21 2009

プリンス・エドワーズ島へ

この日は長距離のドライブになることを覚悟し、朝、六時に出発、アカディアナショナルパークへ。3号線をしばらく走り、1号線と合流したら、今度はすぐに、ナショナルパークへの専用道路を南に下る。地図では近いようであったが、実際には、曲がりくねりの道でかなりの時間を食う。それでも、まだ、時間的に余裕があり、のんびりとこのナショナルパークに向かう。アメリカの東海岸では、数少ない国立公園のひとつだ。島全体が国立公園になっている。このあたりの島では一番大きい。ナショナルパークとは言っても、海岸線には大きな町、**Bar Harbor** などがあり、人々は日々の暮らしをしている。多分、天然の良港なのだ。このあたりの町のビジネスは夏のリゾートが主な観光であろう。海岸線には立派なホテルがところ狭しと建っていた。このパークはウォーターリゾートもさることながら、自然の



大西洋の波です

生態の保護に力を入れているようで波打ち際になる島の周回道路よりも高台にある森のほうがこの公園のセールスポイントのようであった。朝も早いことから、この公園の中の道を走っているのは私ひとり。一方通行の道で、駐車して写真を撮っていても、後に車が来ていないので落ち着いて写真を撮ることができる。残念だったのは、この日は朝から雨模様。浜辺、というより、ここは岩の海岸線の一部に人口の浜が作られているようなところ。



ありました。ここにも **Covered Bridge**

そこで、車の中から写真をとるのが精一杯。

少し荒れ模様のせい、か、北海の風は随分冷たかった。そう、この風は、大西洋を渡って吹いてきているのだ。そう思っただけで、すこし冷たい感じの雨。朝、二時間のマージンがあった時間も、ここですっかりなくなってしまった。

ということで、また、元の道の1号線にもどり、カ

ナダとの国境の町 **Calais** に向かう。北の果ての海

岸線のハイウェイを走っていると、なんとなく三陸海岸の道路にいるような気分。もちろん海岸線に行けばたくさん楽しみはあるだろうが、この先の行程は長い。ここはおとなしくカウティハイウェイを飛ばすことにした。途中、Calais の町に入る近道があったが、ここは意識して景色がいいという、そして、何よりもそのハイウェイが一号線ということにこだわり、すこし遠回りではあったけれども海岸線を走る。

そして、ようやくのこと、国境の町 Calais に到着。さあ、いよいよカナダだ。国境を越える



こだわりの 1 号線を走る

るには橋を渡るがその前にインフォメーションセンターがあったので、ここに立ち寄ると、例により、人柄穏やかなご婦人が三人ほど待っていた。ネブラスカから来たと行ったら、自分はいったことがないけど随分遠くから来たんだねと呆れ顔。そして、いよいよカナダへの入国。このルートはそれほど混んでいなかったが、通関のゲートで、カナダに行く目的、どこに止まるのか、仕事は何をしているのか、そして、持ち物をいろいろ聞かれたあと、あそこに車を止めて検査を受けろ、そして、入国手続きをしろと指示された。そこで、建物に入ると、なかで、係官が親切にあそこに行き、手続きをしろと教えてくれた。車でこんなところまでくる外国人が珍しいのか、係官にはいろいろと仕事のこと、旅の計画などチェックされ、カナダには、三泊四日で滞在するつもりだと説明したら、パスポートには、五日滞在としておく、大丈夫だね、と説明してくれた。そのあと、車の中の持ち物を調べられ、最後に、係官はコンピューターのチェックを始めた。ログインを指示され、そのあとコンピューターの中身、なにを見たのか分からないが、なかなか厳しかった。ドキュメントのなかにあるファイルでも見たのかね。相当長いこと、あれこれと操作をしていた。でも、随分感じのいい係官で、検査が終わったあとは、いろいろと冗談を言っていた。

そして、いよいよカナダをドライブということに。ここでもこだわり 1 号線を走る。感激のカナダドライブの始まり。この 1 号線は、Lepreau という町あたりからアメリカのハイウェイ並によく整備された道路になる。そして、ある小さな町で、インフォメーションセンターがあるというのでここによろうとハイウェイを降りて、田舎道を走って。やっぱり、ローカルの道は少し整備が悪い。そんな中で目的地を探したが、これがなかなか見つからず、やっとも思いでたどり着いたら、ここも閉鎖中。シーズンオフなのである。仕方なく車の向きを変え、さあ、元に戻ろうと走り出した。と、ナビが右に折れろという支持。えっ、右は水がとうとうと流れている川だぜ、ナビの指示に従っていたら、川のなかにどぶ

んだったよ、といった具合。クワバラ、クワバラ。

こうして、Moncton の町まで走り、そこからは、PEI にわたる橋へのアクセスの町、Sackville へ。そして、Bayheld の町までの、長い一直線の道。その道路わきに見慣れぬ標識があった。車のなかから手を差し出し、なんと、ヘラジカに食べ物を与えているというもの。アメリカでは、鹿が道路に飛び出して車と衝突することが良くある。カナダでは、鹿ではなく、このヘラジカとの衝突事故があるようだ。調べてみたら、そうした警告を示す道路標識があるようであるが、それにしても、この標識一体どんな意味があるのだろうか。走りながら確認できなかったが、とてもユニークな感じがした。



プリンス・エドワード島にいく橋を渡ったが、これが随分長かったね。ここは有料だが、島に入るには金は支払わない。島から出るときに払うようななっている。考えてみればあたりまえ。島に来る人はこれから、島にお金を落としてくれる人たち。そして、島から出てゆく人たちは、この島でいい思いをした人たち。その人たちから料金を取ろうというわけだ。これなら、人手も少なくてすむし、少々高い料金でも納得ということか。

Prince Edwards 島への橋。往きは只。



島にはいり、Charlottetown に向かう。すぐに、高速の標識があり、ここに入ろうとしたらナビが別のルートをサポートしてきた。ははあーん、ナビが古くなったためか、旧道を指示しているのだな、それなら、問題なくたどり着くだろうとたかをくくった。ところがさてどっこい。これがとんだ大間違い。走る道は段々悪くなり、そのうち、周りに雪が残っているところに入り込

先は雪道。ナビをそこに行けといってる

む。そして、最後には、このまま進めという道を見たら、なんと、まだ雪が山のように残っているのだ。しかも、そこを車が走っているような様子はない。こりゃー、大変だ。元に戻らなくてと思ったが、さあ、ナビが道がわからないと行ってきた。そんなん、と思い、もう必死で、確か、この方角だろう、と検討をつけ、田舎の未舗装の道を走る。わけの分からぬ車が入り込んできたと、番犬らしき犬が吠え立てて追いかけてくる。とんでもない道に入ってしまったものだ。でも、島とは言え陸続き。ここは腹をくくり、何とか車がたくさ

ん走っている道路にでる。ナビはもう場所を見失っているが、まあ、まちがいなかろうとほかの車のあとをついてゆくことにした。それにしても道を間違えて旧道を案内されたのにはまいった。結局、もう、すでに購入してから二年も経ているナビの更新をしっかりとやっていなかった罰というところか。このあとも、この反省が何度を経験する。

でも、未舗装の道を走ったおかげで、この島のおくを覗くことができたような気持ちに



アンもこんな自然を見ていたのかな

もなったし、考えようによっては、かえってアンのふるさとに余計近づきになれて酔うな気がしたね。

寒気団が随分下がっており、雨が西から追いかけています。とうとうここで追いつかれたという感じです。ここからは、まだしとしと雨でしたが、そのなかのドライブとなる。まあ、ここまで、良く天気が持ってくれたと感謝しなければならないでしょう。

Charlottetown に着き、すぐに目的のモーテルは見つかったが、まだ、すこし明るかったので、ダウンタウンまでそのまま足を伸ばす。ところが、ここでも街の中心まではよかったが、さて、モーテルの住所をナビに入れたら、そんな場所はないとでてきた。またしても。さあ、大変。さっき来た道はうろ覚え。

でも、とにかく走らないことにはどうにもならない。ここも感で、何分か走り見つからなければまた戻ればいいさといった調子でしばらく探し回る。これも運良く、モーテルが見つかったが、今度は、その入り口が分らない。こうしたケースは、新しくできたモーテルのときによくある話。つまり、できたばかりでアクセスに非常に無理をしているのである。そんなわけでここでも、何度も入り口を探すために同じ道を行ったり来たりしたが、その分、綺麗な部屋に泊まることができたと一人納得。



Charlottetown の市庁舎か。

この日の行程

Bucksport ---→ Ellsworth ---→ Bar Harbor ----> Machisas ---→
Whiting ---→ Lubec --→ Calais ---→ St. Stephen ---→ Saint John

---→ Moncton ---→ Dieppe ---→ Sackville --→ Port Elgin --→ Cape
Tormentine ---→Borden ---→ Charlottetown

この日の走行距離 489 miles でした。

East 探しに

第七日目

April 22 2009

昨日は道に迷い、とんだ羽目に陥ったが、そのひとつの原因は、この島が思った以上に広いということ。時間が予定より掛るのだ。というわけで、この日は極力無駄なコースを走らないように心がける。

島のなかのドライブは、Charlottetown から、島の真ん中をドライブするコースを選択。一路大西洋の海を目指しました。のんびりしたのですが、空はどんよりと曇り、まあ長い旅のなかで1日や2日は仕方ないでしょうとの思い。それでも、海岸までは、雨も降らず、無事記念の写真を撮ることができた。そして、



Cavendish にある「赤毛のアン」の作者、モンゴメリーの記念館を訪ねる。実は、このとき、このミュージアムの近くにインフォメーションセンターがあり、ここで道を尋ねようかと思ったら、なんとここがシーズンオフでただいま改装中。そこには作業員しか折らず、なにも知らないという。しかたなく、そのあたりとの

ハイカラなコーヒーの店

感をもとにすぐにミュージアムの入り口は見つかったのですが、このときにわかにおなかの調子がおか

しくなった。さあ、たいへん。いつもはこんなときにはすぐにガソリンスタンドに飛び込むのだが、そのガソリンスタンドがない。ナビで探したら、6マイル先と出ている。ここは、痛いおなかを押さえて、少々無理をして飛ばす。カーブもスピードなど落としてはられない。風光明媚な海岸線が続いているのだが、こちらはそれどころではない。そして、やっとのことで見つけたガソリンスタンド。これがまた、なんとなく頼りない。なかには、数人のお年寄りたちが集まって井戸端会議をしている。ガソリンを入れるなら堂々とトイレを借りられるのだが、そんなゆとりがない。ドアをあけ、「トイレを貸してくれ」といったら、そのガソリンスタンドの番をしているご婦人が、この鍵を使えと渡してくれた。これはありがたい、たすかったとの思いで用



プリンス・エドワード島で

を済ます。そして、鍵が掛っていたので、また、鍵をかけておこうとしたら、その鍵がど

うやってもかからない。仕方なく、鍵が掛らないんだけど、といいながら鍵を返したら、「ああ、あれは鍵はかけなくていいのよ。」と来た。こちらは、きよとんの状態。それでも、これで気を取り直し、もう一度、Cavendish に戻り、博物館を訪ねる。車が一台だけ止まっていたので、やっているのかと思いきや。ここもシーズンオフのため閉鎖中。折角ここまで来て、なかにはいれず、ただ、かえるのも癪だね、と思い、ここからは関係者以外は立ち入り禁止の着いた扉が開いていたので、失礼してのっそりとなかに入る。そして、勿論、中には入るわけには行かなかったけれども、建物はじっくりと見学することができた。一人記念写真もちやっかり撮ってきたというわけ。ここまで来たのだから、これくらいはいいでしょうの気持ちで、満足、満足でした。



モンゴメリーの記念館で

この日は相当な長旅。ただ、あまり時間がかかるようであれば、途中でコースを短絡することもできるので、まあ、そう、気をあせらずに島をあとにすることにした。それでも、この方角に行けば近道になるとコースを選んだのに、やたらと違う道を案内する。やっぱりナビに問題があるようだ。カナダの道路がしっかりと入力されていないからなのか、それでも、道路が新しくできたためなのかはわからないが、もし、前者だったらこれはちょっと心配。そんな気持ちで走っていると、空模様が怪しくなってきた



これ、もうさんがモーテルのカンバン

橋が落ちることはないが、船のおおる高架の部分のところは流石に緊張した。そんな具合

朝は、予定より一時間早く行動開始をし、余裕を持っていたつもりですが、こんなことであつという間に貯金を使い果たしてしまいました。でも、

朝は、予定より一時間早く行動開始をし、余裕を持っていたつもりですが、こんなことであつという間に貯金を使い果たしてしまいました。でも、



PEI のナンバープレート

た。そして、雨足がはやくなった。それでもどうか、橋のところまでくる。ここで、島から出るのにチャージされるという、片道有料の橋。金額は、14ドルでなかったかと思うが、これで往復と思えば安いもの。ただ、このころになると強烈な海風が北から吹いてきた。対向車線が南側だから、ハンドルをしっかり握っていれば、問題はなかったが、それにしても横風をうけてホロ付のトラックは横ぶれしている。速度も 80 マイルの制限速度であるが、みんな、のろのろ 60 マイルで走っている。まさか、

だから、橋の長さを測ろうとなどという気持ちのゆとりなどまったくない。あとで、メーターをみたら、これが、なんと、7 マイルもあった。つまり、10 キロもある、海に掛る橋だった。無事、この橋を渡って一安心。さあ、これからは、ただひたすら、北に向かい足を伸ばす。11 号線を、Shediac という街から、Miramichi へ。

ここで欲をかき、せっかくここまで来たのだし、Montschic-Chocs の半島は短絡すると決断し、そのかわり、Chareur Bay の南側にある半島の先まで行くことにした。Miramichi から、11 号線を海岸沿いに走る。道は一本道だし、潮風を楽しみながら走っていけばよいと高をくくっていたら、その途端に道を間違え、新しくできた高速に入ってしまう。つぎ



の出口で引き返せばよいかぐらいに気楽に考えていたが、これがまた、田舎の高速でなか

なぜか、雪からモヤが猛烈。

なか出口がない。やっとのことでつぎの出口でおりたが、この高速が新しいものであったためなのか、ナビが迷っている。こうなると自分の方向感覚しか便りになるものがない。海岸線に出ればよいのだから、こっちに行けえと走っていたが、なかなか、それらしきところにでてこない。高速を意外と長い間走っていたのだ。そのうちナビの言うことを聞いていたら、段々田舎道にはいる、挙句のはて、ナビがサテライトロスなんていい始めた。えっ、冗談は止めとくれ、と今度は真っ青。なにしろ、田舎の農家に通じる道しか見えな。これは、迷ったな。参ったな。そして、随分、とんでもないところを走ってしまったあと、ここは、素直に元に戻ろうかと観念した。車を U-ターン。と、そこにあった農家で、ATV を洗車している人たちがいた。ATV を見ただけで親密感を感じるから単純なもの。早速そこに行き、道に迷った、この町に行きたいがといったら、ここを 7miles ほど走って、左に折れろ、そうすれば、広い道にでると説明してくれた。ところがこれがまた曲者。地元の人には、たかが、7mile の一本道といっても実際は、曲がりくねり、いくつも交差点がある。そして、言われたとおりに走ったつもりが、行き着いたところは、林に突き当たり、その中に入ってゆくような道。これではとても海岸に出るどころではない。でも、かなり海に近いところまできているのは確かなようだ。まさか、その匂いがしたというわけではないが、左に曲がるところを右に行ったら、大きな道にたどり着いた。思わず、「わあー、助かった。」の思いがどっとわいて来た。これはついてると思うほどだ。これで、また、時間を半時間くらいロスした。でも、ここで、もとに戻るわけには行かない。

こうして、カナダの東の海岸にある小さな半島を北上。そして、Caraquet という町についた。ここのフェリーの乗り場にインフォメーションセンターがあり、そこで一休みと思ったら、これがまた、シーズンオフで休み。仕方なし、あきらめて引き揚げようとしたら、

ビジターセンターから洗濯物を抱えたご婦人が出てきた。折角来たのにクローズで残念だといったら、みやげ物は、ここから 2~3 マイルいったところに教会があり、その隣にお店があると教えてくれた。これはありがたいと早速このみやげ物屋に。田舎の港町の小さなみやげ物やという感じであったが、ここにしかないものもたくさんあり、カナダのいいみ



参った。海が凍ってるぜ

やげ物を手にいれることができた。びっくりしたのは、ここでの土産物を購入し、さあ、急いで、次に目標地点に行かなければと、道路にでた途端にパトカーがいて、これとしばらくいっしょに走るはめに。もちろん、気はせくがスピードは出せない。なにしろ、カナダは^キ表示。うっかりアメリカのつもりで、マイルで走っていたら、たちまちスピード違反で捕まり、参ってしまうぜ。そんな冗談をいえるくらい、まだ、このときにはゆとりがあった。やがてパトカーと分かれて、気持ち

が落ち着いたのか、ふと、海を見ればなんとこれが全面凍結しているではないか。こりゃーと思わず声が出る。そして、海の開けたパーキングに行き早速記念写真。まるで白熊の気分だね。ここは、もうひとつ小さな湾になっている Nepisiguit Bay というところ。大きな見方をすればここは、Saint Lawrence 湾の一角ではあるが、セントロレンス川とは、Pennsule De Gaspe をはさんだ反対側だ。

Bathurst の町に着き、ここから Champbellton に行く。最初は、時間があれば、De Gaspe の半島を走破するつもりでいたが、



ここだけでも、あと五時間は掛る。すでに時間は予定をかなり超過している。大人しく、

こりゃー、参った。写真を一枚。

Mont-Joli に向かうしかない。ここから先は山の中の道 132 号線を走るということで、ここでガソリンを補給することにした。そして、カードを使おうとしてら、なんと、カードが使えない。Caraquet のみやげ物やでは無事使えたのに、二度、挑戦してもだめだった。何かおかしい。仕方なく、ここは現金でガソリンを入れる。そして、Natapedia という川沿いの道を走る。川を挟んで見える対岸のクリフはなかなかすばらしい光景だ。せせらぎの音を心地よく聞きながらのドライブ。すこし空気は冷たいが窓を開けてのドライブにご機嫌。なにせ、この道を走っているのは、私の前に一台しかいない。もちろん、パトカーではない。

そして、夕方の 6 時に Mont-Joli につく。でも、ここから、この日に宿 Riviera Du Loup

までは、まだ、一時間半は掛る。夕闇がせまっている。心配なのは、しっかりとナビがホテルを見つけてくれるかどうかだ。



雪原が出現

どん行く先とは反対側に走っている。どうする、と考えたが、ここは、パトカーのいないことを祈って U-ターンするしかない。薄暗くなっているし、対向車線も、後続の車もない。幸い中央分離帯はないし、よし、ここだ、やっちまえ、といった調子で慣行。これで無事、方角は間違いない。ナビもあてにはならないが、大きい町までは何とか行き着く。こうして、フランス語の名前がついた、**Riviera Du-Loup** につく。インターを降りて、早速ホテルを探したら、これが運良く見つかった。これで一安心と思いきや、ナビはとんでもない細道を案内している。そこでもう一度、検索。どうやら、しっかりと案内してくれているようであるが、これがまた、行けども行けどもそれらしきホテルはない。確かにホテル街にきてはいるが、目的のホテルがないのだ。仕方なく、何度も U-ターンを繰り返したあと、同じホテル仲間のところにいけば何とか分るだろうと飛び込む。教えてくれたのは、このもっと二マイルくらい先だという。ナビがいい加減だったのだ。これで何とかホテルまではついた。時間を見たら 10 時だ。この日は朝の 6 時から走り出したから、かれこれ 16 時間も運転している。ところが、ありがたいことにここに時差が一時間あった。ということで、ホテルで

は 9 時。まだゆとりがある。早速、チェックインしたら、今度はカードが使えないという。カ

ード会社が支払いを止めているというのだ。こちらは、真青。ところが、ホテルのカウンターの兄さんが、これまたひょうきんな男で、「こんにちは」と「ありがとう」の二言だけ日本語が話せると愛嬌を振りまいている。このお兄さんが、すぐにカード会社に電話をし

ハイウェイ 132 号は、川沿いに走る道。インターステーツはあるが、しばらくカウ
ンティハイウェイのこの道を走る。セント
ローレンスの対岸が見える。もともとはそ
の海岸線を走るつもりでいたが、そのうち
時間も遅くなり、ここは、インターステー
ツのハイウェイに乗ることにした。が、こ
こでもまた、なんとナビが間違えて、
Mont-Joli に行けといっている。おいおい

冗談はよしてくれ、今、そこから来たばかり
だぜ、と思ったときにはもう遅い。車はどん



セント・ローレンス川の夕焼け

ろという。アクティベーションをしないとこれからも使えないという。財布を除いたら現金が 100 ドルくらいしか残っていない。これでは、これからのホテル代とガソリン代には間に合わない。ここは何とかしなければ、と気持ちはあせる。電話をかけて、カード会社と接触したら、これまた、なにやかやと番号を入力するように指示されるが、これまた厄介。ホテルの兄さんが、なら、コンタクトまではしてあげるから、そのあとの作業は自分でやれという。つまり、セキュリティの分まではできないというのだ。しかたなく、ここからは自分でやることになったが、カード会社もよくしたもので、日本語の分る通訳をつけてくれた。こうして、カードのセキュリティの暗号をもう一度連絡し、無事に回復。カード会社から、もう大丈夫ですのお墨付きをもらう。でも、またいつ止められるか分らない。そんなことを考えての眠りは、ぐっすりなんてものではないことは容易に想像つくでしょう。

どうも、このトラブル。いつもアメリカの中で使っているものが、急に、この日になりカナダの、しかも僻地で使用されている。これは何か事件に巻き込まれている可能性がある。カード会社が懸念して止めたようだ。後で聞いた話では、海外に旅行するときは、普段、使用する場所から離れて使うときには事前にカード会社に連絡しておくのが常識だそう。これも、いい勉強になりました。それにしても、これまで、アメリカ中を旅してきたのにこんな目にあうなんて、誠に、あとになれば笑いばなしですが、そのときの私の気持ちは、ひょっとしたらここで野垂れ死にかと思ったほどだから、心臓によくないことこの上なしでした。

この日の行程

Charlottetown ----> Cavendish ---> Elgin ---> Shediac ---->
Miramichi ---> Brantville --> Caraquet -----> Bathurst ----->
Campbellton ---> Mont-Joli ---> Rimouski ---> Riviera-du-Loup

この日、走った距離は、606 miles でした。

East 探しに

第八日目

April 23 2009

もう、八日目になりました。昨日は多分最北端という感じだったんじゃないでしょうか。それにしても、カナダの海は凍っていて迫力満点でした。今日は、セントローレンス湾から川を遡り、オンタリオ湖のほとり、トロントまでのドライブ。数百マイルという長距離ドライブでした。

Riviere-du-Loup の町から、小雨ふるインターステーツ 20 号を突っ走る。カナダの高速は、アメリカの東部の道路と違い、どちらかというとなブラスカ当たりの雰囲気。なんとなく、ノンビリとした感じ。スピード制限は、100 キロになっている。まあ、70 マイルは大丈夫と決める。回りの車も大体そんなもの。しかし、中には、せっかくの高速とばかり、30 き随分飛ばしているものがある。みると、120 キロでは、罰金



カナダのインターステーツ 20 号

90 ドル、130 キロでは、210 ドルと書いた看板がある。このあたり、広大な土地がら、よく見れば、交通の取り締まりはパトカーではなくて、ヘリでやっているとの、ご丁寧な説明まである。さすが、カナダ。ケベックまでのこの高速を走っていて、やたら、Riviera ○○という地名が出てくる。よく見れば、そこは橋の架ってる。つまり、Riviera とは、フランス語で River なんだと直ぐに分かった。こんな風にして単語を覚えれば、老人でもまだ



風格のあるケベックの町

まだいけます。この当たりの町は、ほとんどが、Saint-となっている。例外がないくらいだから、これも何か歴史の産物なのだろう。そして、対岸がぐっと迫ったところに橋があり、ここをわたるとケベック。

ケベックの町は、町の中心に行くと、まるで中世の要塞がそのまま残されている歴史のある街。町の中にある昔の建物、これは、頑丈にできているからなのか、それとも、みんなに親しまれた歴史の産物なのか、いわゆる昔のお城がそのまま残されており、その中で今でも生活が営まれている

のである。そんな町に来たの人々の活気を感じることができた。

何百年経っているのだろうか、こんなお城のような建物と一緒に生活としている人が、うらやましくもあり、また、憧れさえ感じた。



風格のあるケベックの街角

町のカンバン、街角を歩いている人たちを見ると、このケベックはとにかく、フランスの田舎町という感じです。昨日の Chambellton 当たりからこの辺にかけて、カナダのケベック州は全く英語が通じないんだから。

Riviera-du-Loup から Quebec までは、セント・ローレンス川というより、幅が 20 キロくらいあるから、入り江というのが適当かもしれないが、この湾の南側をはしった。ケベックからベモントリオールには、今度は、川の北側のコースを走った。モントリオールに着き、ここに入ったとたんに石油の精製会社が延々と



いくつ、タイヤがついてんだ、この車見てるだけで、tiresome???



こんな中で今でも生活をしています



ケベックの街角で これ住宅？

続いているのにびっくり。何でや、という感じ。もちろん、カナダには、オイルサンドという石油がでるのは有名な話。しかし、これは、カナダの西部のこと。東のこのあたりで石油がでるとはあまり聞いたことがない。モントリオールまでは大きなタンカーでも十分航行できるようなところであるから、ここの石油は海外から運ばれて来ているのかも知れない。一度、調べてみなくては。

そして、町に入ると、あれかと思わせるようなモニュメントが目にはいった。多分、オリンピックの記念に作ったものなのでしょう。

空に向かってそりあがった、ひときわ目立つ大きな建造物だ。如何にも近代建築という感じのするもの。私にはあまり興味がないが。

ナビのおかげで、こうした町のダウンタウンを直ぐに見付けることができるようになった。町の名前を入力しておけば、目的地が大体は支庁舎の近くということがわかったからだ。というわけで、難なく市庁舎にたどり着きましたが、これがまた立派。大げさにいえば、中世の宮殿がそのまま残っているような建物。うらやましいね。こんな建物のなかで仕事ができるのは、贅沢意外のなにものでもないよ、と、悔しいから、道端に車をとめて、道路のなかで写真を撮りました。ところが立派なのはこの建物ばかりではない。今度は、コートハウスなのかな。まるで、建物そのものが歴史博物館という感じ。驚くのはもっとある。ハイウェイの高架からみると、なんと、町のあちこちにあの教会の塔が立っている。その数、すごいね。さすが、宗教の力という感じがした。



オリンピックのモニュメント 間違いない



ご立派。モントリオール支庁舎か？



こちらはコートハウス？ すごー

そして、モントリオールから、さらに南にむかいトロントへ。今日は、ただ、ひたすら走りまくり。それも、クレジットカードのことを心配しながら。参ったよ。

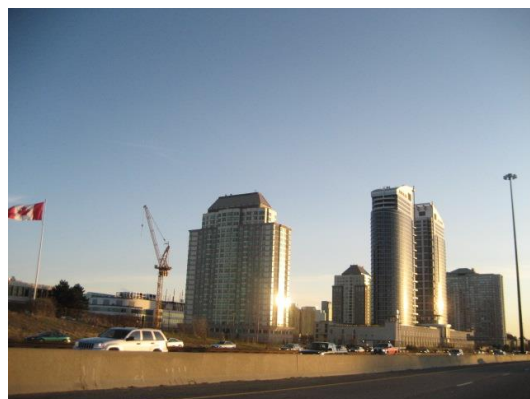
トロントに近づくと、道路がものすごい混み様。この日はウィークディですから、まあ、通勤の帰りの車でしょう。こちらはこの時間にダウンタウン向かっての走りですから、あまり気にならなかったが、さてさて、ホテルの場所によっては、明日の朝は通勤地獄に巻き込まれるかなと心配しながら、トロントの街中のハイウェイを走る。

この日は、とにかく、カナダのインターステーツを走りまくったという感じの 590 マイルドライブでした。宿には、八時半に着きました。トロントについて、まぶたがトロントし

て来ました。



トロントへのハイウェイ



トロントのダウンタウン

では、お休み。

Riviera-du-Loup ---→ Quebec --→ Trois-Rivieres ---→ Montreal ---→
Cornwall ---→ Kingston ---→ Oshawa ---→ Tronto

走った距離は 590 miles でした。

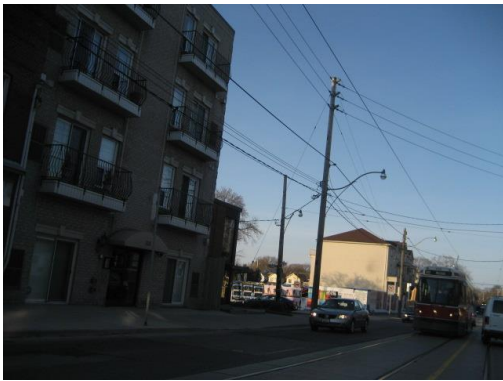
East 探しに

第九日目

April 24 2009

ナイアガラ見物

今日は、ナイアガラの滝を見物して、アメリカに戻る日。なんとなく気持ちがうきうきしているのは、もう、フランス語に悩まされることがなくなるからなのでしょうか。そんなうきうき状態でモーターを出発。トロントの下町を走りましたが、幸運なことに通勤の流れとは



おっ、路面電車だ。

はっきりでなくてごめん

なうきうき状態でモーターを出発。トロントの下町を走りましたが、幸運なことに通勤の流れとはぎゃくでしたので、すんなり市内から抜け出ることができた。驚いたのは、このトロントの街中を電車が走っていたこと。東京は今では都電がなくなったが、やっぱり下町あたりには、昔の風情を残した電車なんかがノスタルジアを感じさせてくれるのではないのでしょうか。そんな気持ちがあったから、対向車線の電車の写真に挑戦しました。でも、気づいてみたら、自分はこの電車の軌道のなかを走っていたんです。前に車がいたからよかつたものを、ひょっとして、これ交通違反だったかも知れません。クワバラ、クワバラ。

トロントからエリー湖のほとりのハイウェイを、心躍らせながら走る。もうすぐ念願のナイアガラだ。ナビには、ナイアガラ・フォールと入れてある。これで安心と思いきや、近くまで来たが、滝がどこにあるか分からない。街の名前がナイアガラ・ホールなのだ。流石にこれだけでは、ナビも滝までは案内してくれない。ダウンタウンまでがナビの仕事なのである。そこで、まだ、朝も早いことから、散歩をしているおじいさんに聞いたら、「お前、何、言ってんだ。」という感じ。ナイアガラだよ、といったが通じず、結局、ここでは、滝は、Great Falls なんだ。おじいさんにそういわれて納得。こんな経験も旅の楽しい経験。

トロントからエリー湖のほとりのハイウェイを、心躍らせながら走る。もうすぐ念願のナイアガラだ。ナビには、ナイアガラ・フォールと入れてある。これで安心と思いきや、近くまで来たが、滝がどこにあるか分からない。街の名前がナイアガラ・ホールなのだ。

流石にこれだけでは、ナビも滝までは案内してくれない。ダウンタウンまでがナビの仕事なのである。そこで、まだ、朝も早いことから、散歩をしているおじいさんに聞いたら、「お前、何、言ってんだ。」という感じ。ナイアガラだよ、といったが通じず、結局、ここでは、滝は、Great Falls なんだ。おじいさんにそういわれて納得。こんな経験も旅の楽しい経験。



感激の一瞬。そんなガラじゃない？

言われたように、坂を下り、川べりにでて、この道をしばらく走ったら、ありました、ありました。やったぞ、滝が見えたよ。これ、正真正銘のナイアガラだよ。感激。だれ？、「そんながらじゃ、無いだろ〜っ」なんて言っているのは。車で滝のそばまでいく。まだ、朝が早かったので、道路はがらがら、滝を見ながら、徐行運転。すばらしいね。現物を見ると、回りは観光地化しているので、自然の中での雄大な滝というわけではないが、しかし、その大きさには圧倒される。アメリカ側の滝をみて、感激し、そして、ちょっと目を変え、少し離れたところにカナダ側の滝がある。猛烈な水しぶきが舞い上がり、川から立ち上がったしぶきが道路を水浸しにしている。すごい、しぶきで滝つぼが判別できないほどだ。カナダ側の滝が迫力があるとの前評判を聞いていたので、車でぐるぐる行ったり、来たり。それと



アメリカ側の滝

いうのも、近くにあった駐車場は、観光バス用だけ。後は、近くにホテルの駐車場があったが、ここに入るわけには行かない。そこで、もう一度、アメリカ側の滝がある川の対面まで戻り、ここにあるパブリックの駐車場にいれる。ここは、30分、3ドル。ただし、ここに駐車するには、自動の料金箱にお金をいれ、駐車権のプリントをしてもらおう。そして、この駐車権を車の窓の見えるところに表示しておくわけだ。ここは、アメリカ側の滝がよく見える一等席だ。ここから見るアメリカ側の滝は、岩が崩れていて、なんとなく、滑滝という感じ。それだけにしぶきが少ないので、迫力はカナダ側の滝に負けているということか。それにしてもその推量はものすごい。まるで、ここで、二つの世界が分離されているかのようだ。

よくみれば、小さな船が滝つぼの周りを回っている。観光船だ。でも、滝はこれだけ雄大。遠くから、みて、その迫力が伝わればそれで十分。でもうれしいね、世界の三大滝のひとつを目の当たりにみることができた。もちろん、ご満悦の記念写真。ただ、ただけないのは、この滝を見ながら賭博をしようという、数々の立派なカジノ・ホテル。シーズンにはすごいだろうね。滝だけに、その落としどころに注意というところか。

滝を見て、満足し、いよいよアメリカかと、言う段になり、カナダの土産を買ってない。ここには、Duty Freeがあるはずだ。というわけで、パーキングからでて、ビルのなかを走っていたら、アメリカにわたるレインボーブリッジの前に来た。ここに、通貨の交換をしているオフィスがあったので、ここで、Duty Freeはどこかと聞いたら、「後ろを向け。お前の目の前にあるだろう」という具合に説明された。車をここに止めて買い物してもいいかと無理に頼んだら、「保障はできないが、いいでしょう。私はしらないことにするよ。」

と粹な返事。やるね、このおばさん。でも、とりあえず、ありがとう。そして、そのお店に。カナダの特別な土産があるというわけではなかったが、見て楽しくなるような人形や、アクセサリーがあったので、記念に買う。値段はカナダドル表示だが、観光地のみやげ物でも、特別に高いという感じはしなかった。金を払い、ここでもクレジットカードが使えるかどうか心配であったが、無事、使えたので、これでクレジットはアクティベートされていることが確認でた。ほっとした一瞬。そして、みやげ物をもらおうとしたら、みやげ物もは、一時預かり。ここに大きな駐車場があり、ここから出るときに、つまり、レインボーブリッジに入るときに渡すというわけ。カナダに持ち込まれてはもともともないというわけだ。なるほど、うまくできている。前にカナダに行ったときにも、お店のお嬢さんが、検問所に入る直前のところまで運んでくれたことを思い出した。つまり、ここでは、この駐車場に車を止め、買い物をし、中には、ここから、滝の見物にいく連中もたくさんいるのだ。それなら、最初から、車をここに止めておけばよかったのだが、気を取り直して、先ほどの通貨の交換場所まで車を取りに行く。そして、一方通行のところをバックして戻り、U-ターンをして無事、**Duty Free** の駐車場に入る。せっかくだから、ここでも記念写真を撮った。いつになるかわからないが、この次、来るときの参考だ。こうして、無事、みやげ物をもらい、橋を渡る。と、そこに通関がある。カナダから車でアメリカに入る人は多い。ここで、どこに行っていたのか。カナダのどこから来たのか。仕事は何か。アメリカのどこに住んでいるのか、などいつものお決まりの質問のあと、係官が、車の助手席にとりつけたビデオカメラを見付けて、「それは、何だ。」との質問。これは、一人旅だから、運転しながら、景色の記録をとるためのもので、これがいいんだと説明。彼も、「不ーんっ。」と、ちょっとばかり関心してくれたのかな、それとも、ここまで、普通のドライバーがやるかという感じで、そのあとは、結局、荷物の検査をすることもなく、無罪放免の形。というわけで、難なく通過。こちらは、一時間はチェックされるだろうと覚悟してただけに、拍子抜け。言葉の聞き違いでもあれば大変。そこで、もう一度、「もう、いいの？」と確認。「OK」との返事をもらったが、それでも、後か



決まっているじゃ、ありませんか。



Buffalo の街角で

カナダから車でアメリカに入る人は多い。ここで、どこに行っていたのか。カナダのどこから来たのか。仕事は何か。アメリカのどこに住んでいるのか、などいつものお決まりの質問のあと、係官が、車の助手席にとりつけたビデオカメラを見付けて、「それは、何だ。」との質問。これは、一人旅だから、運転しながら、景色の記録をとるためのもので、これがいいんだと説明。彼も、「不ーんっ。」と、ちょっとばかり関心してくれたのかな、それとも、ここまで、普通のドライバーがやるかという感じで、そのあとは、結局、荷物の検査をすることもなく、無罪放免の形。というわけで、難なく通過。こちらは、一時間はチェックされるだろうと覚悟してただけに、拍子抜け。言葉の聞き違いでもあれば大変。そこで、もう一度、「もう、いいの？」と確認。「OK」との返事をもらったが、それでも、後か

ら追いかけてこないかと、おそろおそろちょっとばかり走り、止まり、後ろを確認。やっぱり、何も追いかけてくる様子もない。何だ、これで終わりか。ついつい、浮かれて、「よし、やった。」とばかり、アメリカ側の滝に流れ込む川べりを飛ばす。と、なんの拍子か、バッファローに行く道を間違える。引き返そうと思ったら、行けども行けども、Uターン禁止。おかげで、この川べりで、湖から流れ出る滝の上の水を存分に楽しむことができた。



ペンシルバニアだ～

バッファロー、エリーの町のダウンタウンをみたがどこもシェーハウスやコートハウスの荘厳なこと、こんな風に今の世に残る建物を築いてきたのは、やっぱり文化に対する感覚の相違かね。それにしてもすごいね。

エリーの町で時間があるということで、STATE PARK にいく。ほんのちょっとした時間つぶしのつもりでいたがこれがまた、すごい。砂州にできた公園だが、数マイルはあるのではという、市民の憩いの場。釣りをしたり、ランニングしているもの、サイクリングをしている家族。砂浜で風揚げをしている家族。ベンチで一人静かに読書なんて言う人もいたよ。これがまた、洒落ているんだ。この公園を一回りしたら、まっすぐ、Cleveland に向かうつもりでいたが、この公園が思った以上に大きく、ガスが底をついてきた。これは、まじめにガソリンスタンドを探さなくては、ひやひやしながらの走りで最初に見付けたのが、なんと自動車の修理工場を趣味でやっているようなスタンド。自動ではカードは使えない。カナダでカードが止められたこともあり、ここは安全にと、キャッシュで払うことにした。

カナダ側のデューティーフリーに、ビールが販売されていたが、アメリカに酒を持ち込むのに手続きが面倒かなと思い、アメリカに入ってからビールを買うことにしていた。ところが、ネブラスカなどでは、ガソリンスタンドでビールが販売されているが、どうも、東部の地域ではなかなかそんな店はなかった。インターステーツでは、ビールはまず売って

いないので、カウンティのハイウェイを走っているときになんとでもビールを手に入れなくては、と、きょろきょろしながらの運転。そして、たまたま見付けた酒屋さん。これがなんと、お酒のドライブスルーの店だった。最初はそんなことが分からず、店のま



Erie の街角で

ん前に車を止めたら、「そこは、車が通るからどけろ。」といわれ、何のことかよく分からなかったが、後から後から車がきて、窓越しにビールを買っていくのだ。なるほど、これはなかなかうまい仕組みだな、と感心した次第。お店は、冷凍室の倉庫があるだけ。しかも、24 本いりの箱での販売だから、随分安かったような気がする。さあ、これで、ビールが手に入った。今晚の、一杯が楽しみ。



公園の岬で

クリーブランドもダウンタウンにいくつもりでいたが、例のエリーの町で時間を使いすぎたのと、モーテルがダウンタウンからかなり離れていたのも、ここでは市の中を走るハイウェイから町の様子を見学。ここも大きな町だね。エリー湖に面した港町で、ここから南にかけてがオハイオの自動車街道、つまり、沢山の自動車工場、そして、その部品工場が立ち並ぶ、工業地帯が始まるというわけ。



Cleveland の街角で

そして、夕飯を買いにモーテルの近くのスーパーに行ったら、なんと驚くなかれ、マグロやトロの上等な寿司が売られていた。なんで、ここに握り寿司が売っている野だろうと思い、「日本人の客はたくさんいるのか？」と聞いたら、あいてはきょとんとしていた。たぶん、「このおっさん、一体、なにを聞いているんだろう」くらいに思ったのだろう。内陸のネブラスカではまずこんな寿司は口にすることができない。

まあ、ここなら湖もあるし、東海岸に近いから新鮮なネタは手に入るのだろう、と、よし、今夜は、贅沢するぞお一つ、てな調子で、ワインつきでお寿司のご馳走となった次第。

この日の行程

Toronto -----> Niagara Fall ---> Buffalo --> Erie ---> Cleveland

この日の走行距離は、 369 Miles でした。

East 探しに

第十日目

April 25 2009

さて、いよいよあと残り二日になりました。オハイオのクリーブランドという町から、リンカーンまで、二日をかけてただひたすら走りまわります。コースは、オハイオのトレドという町に行き、そこから、Fort Wayne の町。そして、Lafayette を通って、イリノイの Springfield という町までが今日のルートです。

久しぶりに頬張ったトロの寿司の余韻を残して Cleveland を出発。通勤帯に入ったら大変と思っていたが、ハイウェイは順調に流れていた。インターステーツよりも風情のある湖岸沿いのカ운ティーハイウェイを Toledo に向かう。その途中に、売れてない車が山ほど駐車している工場があった。まあ、こりゃ大変だ、と思い、どこの工場かと思い、この工場の脇の道路に車を止めて双眼鏡で車種を確認。そして、驚いたことになると、この車がシビックだった。



エリー湖のイーストビーチ

なるほど、このあたりから日本の車メーカーのオハイオ街道が始まっているというわけか、ならよかったが、これだけ工場に在庫しているとなると、販売不振も中途半端なものではないと、逆に心配になってきた。近くには、如何にも安そうなアパートがずらり。つまり、低賃金労働者のこうしてここで生活しているわけだ。



負けるぜ、この在庫 ホンダ車だ

それにしてもこのあたり、裏庭が直ぐにエリー湖の湖岸、あるいは砂浜という家がずらり。釣りや、ボート、それに、ウォータージェットなどに趣味のある人には、天国だろう。それにしても、裏庭にボートハーバーがあるなんて、これは、贅沢じゃーないですか。

Toledo の町も、そして、Fort Wayne の町も、町の中心には立派な支庁舎があり、歴史を感じさせてくれた。このあたりは、自動車産業で栄えた街だから、今では、そうした町

は南部に移っているが、かつては、世界の最先端をゆく工業街だったわけだ。

Maumee という川がエリー湖に流れ込んでいる。この川の水源はインディアナにある。インディアナの西側は、Wabash 川が南に流れオハイオ川に合流している。ということは、インディアナの北東部あたりに分水嶺がわるわけだ。地図を調べてみたら、なんと、Fort Wayne がその分水嶺の中心にあった。町から、たくさん川が流れている。でも、どうして、それほど標高の低いこの街に水がそんなに噴出しているのか不思議でならない。その Maumee 川、このあたりは結構川幅が広い。その川に沿って走っていたら、突然、リスが飛び出してきた。たまた



Toledo の街角

ま、風景の写真を撮るとカメラを構えていたとき。思わずシャッターを切ったら、これがまた、見事にリスが写っていた。して、やったり、の気持ちといたいところだが、それにしてもこちらは、時速 50 マイルで走っているんだぞ。急停車して、追突でもされたらどうするんだ。リス君、君はリスクーだよ、と思わず苦笑い。



あっ、リスだ。 あぶねえー

かと思うと、後続の車が追い抜こうと、スピードを上げて横に並んだとたん、私の車にカメラが取り付けられているのをみてか、急にスピードを落とす。多分、覆面パトカーと間違えたんだよ。こちらは、うつふつと笑いをこらえる。そうこうしているうちに、ハーレーのオートバイに括弧よく、彼女を後ろに乗せて、いい気持ちで風を切っている若いお兄ちゃん。対向車線にきたバイク野郎に手で合図し、どうだいと言わんばかりに猛烈な勢いでエンジンをふかしてぶっとばして行った。まるで、E(C)、良い格好しーだね、なんて思っただけで走っていたら、前方にパトカーに捕まっている車がいる。スピード違反だろう。誰かな、と思いきや、実はそれがこのオートバイのお兄さん。よこで彼女が携帯でなにやら話している。さしづめ、ついてないよってなことぐらいかな。

Fort Wayne に入ることここはかつて知ったるインディアナという気持ちが沸いてきた。インディアナにいたのはもっとずっと南部のほうであるが、広々としたとうもろこし畑など見ていると、なんとなく Vincennes のころが懐かしくなるから不思議なものだ。広いア

アメリカでは、同じ州にいるというだけで、親しみが沸いてくるのだ。だから、野球やフットボール、そして、バスケットなどで州対抗のような雰囲気になるのだろう。



これまた、ご立派。Fort Wayne

やがて、これも懐かしい、Lafayette の街に着く。ここには、かつてスバルの工場を尋ねてきたことがある町。大学があり、その名のとおりラファイエットをたたえて名前がついたフランス文化の色濃い街。懐かしかったですね。

そして、いよいよ、イリノイに戻ってきました。Danville, Champaign は、往きに通った街、とうとうここまで帰ったきたか。この広々とした農場の風景、これが西部なんだ、と、こんな

感じですから、気持ちはうかうか状態。Springfield に着いてダウンタウンに向かう。すると、なんと立派な、庁舎。よくよく調べてみれば、ここはイリノイの州都だったんです。イリノイにはアメリカでも指折りの大都市があるが、シカゴでも、また、セントルイスでもなく、ここ、スプリングフィールドにステーツハウスがあったんです。もう、夕日も沈んだ時刻だったので、その駐車場が空いていた。ここに車を止めて記念写真。これはラッキー、といい気分、じゃー、そろそろモーテルに行こうかという段になり、町の名前を入力、そして、州の名前を入れる段になり、なんと、予約をした Springfield に、モーテルの住所が出てこない。こんな筈はない。また、ナビが迷ったか、と疑ったその瞬間、あっ、いけない。間違えた。予約した Springfield はミズーリ州だったのだ。ここからはまで数時間はかかる。300 マイルくらい離れているのだ。これには参った。間違いの原因はいくつかあろうが、とにかく宿を探さなくては。ナビで近くのモーテルを探す。そして、なんとか、スーパー8を見付け、ここを目指す。ところが、これがまた難物。入り口が、インターステーツの入り口と間違えるようにできている。案の定、とんでもないことに。しまったと思ったが、インターステーツの次のランプまで、少なくとも2から3マイルはある。しかも、とんでもない方角。そして、戻ろうとしたら、こんどは、別の町のほうに案内ができてきて、30 マイル走れと指示して来た。さ



Springfield の State House

っき、モーテルの看板をみたばかりなのにと、気が焦るばかり。もう一度、ナビに住所を入れ直し、インターステーツをあっちにいたり、こっちにきたり。モーテルの場所は見つかっているのに、たどりつかないのである。それでも、30 分近く、うろうろしてようやく

モーテルに。そして、飛び込みで交渉、部屋を取る。ありがたい。アメリカのモーテルはこんな具合に、余程のことがない限り、まずは、簡単に確保することができるのである。

この日の行程

Cleveland --→ Toledo --→ Fort Wayne ---→ Lafayette --→ Danville ---→
Champaign ---→ Decatur ----→ Springfield

走行距離は、 556 miles でした。

。

East(いい人)探しに

第十一日目

April 26 2009

今日は、いよいよネブラスカに戻る日。

昨日、とんだ Springfield 間違いで、モーテルが予約されて折らず、ちょっと、どころか、真青状態。それでも、無事、一泊をすごすことができました。気が焦っているときには、道は間違え、ハイウェイに乗ってしまうと、そのあと、数マイルはやり過ぎさなくてはならないこともありますから、これは、ますます、心臓に悪い状態です。挙句の果てにナビが、別のルートで紹介してくれたのは、二十マイルも先のポイント。これでは、見知らぬ土地で、下手に信じ込



ハイウェイはこうでなくっちゃ

んだらとんでもないことになる。ここは冷静に、ナビのご機嫌を取り直し、しっかりと目的のモーテルにたどりついたというわけです。でも、ありがたいことに、ハイウェイはいくら走ってもただですから、それだけは、まあ、気の慰めになります。

この日は、天気もすこし怪しいようでしたが、それでもイリノイをひたすら西に向かう。このあたりから農村風景が実

にのんびりしている。なにしろ、ハイウェイからは、さえぎるものがないほど、全方向の視界が開けているのだ。牧場があるので、インターステーツに牛が紛れ込まないように柵がしてある。それでも、鹿が時々跳ねられている。やっぱ、アメリカはこれでなくちゃ、と改めてこの西部の良さを感じる。

ミシガン湖から流れ出て、ミシシッピ川に合流するイリノイ川が流れているが、この川から西が一段と高い丘になっている。そして、そこは、また別の世界が広がっているのだ。これがまた不思議だ。丘のように小高くなり、



イリノイ川から西は一段と高くなっている

また、平野に下るというならまだ、ここが、土手程度とおもうのだが、土地が高くなったまま、そこに大平原が広がっている。まさしく、別の世界がそこから始まるというわけである。

ミシシッピー川に突き当たり、大きな橋を渡りミズーリ州に入ると、そこにハンニバルという街がある。ここは、マーク・トーウェンの生まれた街。この博物館に立ち寄る。この町は、ミシシッピー川の川岸にできた町であるが、町中が



マーク・トーウェンの博物館

マーク・トーウェンという感じ。街の真ん中に彼の生まれた家、そして、少年時代に遊んだ森や川、これを舞台にして「トム・ソーヤの冒険」や「ハックルベリ・フィンの冒険」などがここで執筆されたが、街のあちこちに彼をたたえる博物館がいくつもある。二度目にきたのだが、時間に余裕があるので、ゆっくりと見学。朝が早かったので、見学者は私ひとり。その分、博物館の受付の人と親しくなったり、みやげ物の説明を受けたり、こんな時間が旅の楽しみのひとつ。

ハンニバルはミシシッピー川の港町、そしてここから、今度はミズーリを横切ることになる。ハイウェイは工事中で対向車線だが、ここを 65 マイルと走るのとは、といっても、プラスアルファのスピード、したがって、なかなか迫力がある。眠気に襲われたときには、我慢せずに路肩によせ、一眠りする。ちょうど覆面パトカーが隠れていそうな格好で、すぐに道路に出られるような形で止めて、一休みしている。ここを猛烈なスピードで走ってくる車は、私の車をパトカーと間違えて、急にスピードを落とすから、これまた愉快。そんな楽しみ方をしているとすぐに眠気が覚める。



トルネードが今に来そうな雲

ミズーリは、トルネードの通り道でも良く知られた州。北から南下してくる冷たい偏西風と、南から北上してくるメキシコ湾からの吹き込みの風がぶつかるところで、良くここに前線が発生するのだ。この日も急に空が曇ってき

たかと思うと、猛烈な風が吹きはじめ、前方の空の一部に黒い雲が立ちふさが
る。そこは間違いなく嵐。これがすごい。その雲の中に入ると、視界は 10 メー
トルくらいしかない。前の車のテールランプを走って、ゆっくりと後をつけて
いるのが一番安全。ところが、自分ひとりとなると、これが恐怖だ。この先に
果たして道があるのかという気にさえなる。でも、長い旅の間に積もり積もっ
た誇りを落とすには程よい雨だ。でも、十分も走っていると、もう、空が明る
くなっている。毎日、こんな激しい空模様の下で生活している人は、どんな風
にこの自然を克服しているのか、一度聞いてみたいような気がする。

ミズーリ州は、西をミズーリ川が流れている。その港町 St. Joseph まで繰れ
ば、ネブラスカまではあと僅か。といっても、これから、まだ二時間はある。
ハイウェイ I-29 から、はるか西には、ネブラスカの台地が広がっている。ミズ
ーリ川の西に広がる広大な平原だが、これまた、一段と高くなった世界がそこ
に広がっているというわけ。アメリカ西部には、こうした、標高の違う世界が
いくつもあり、それぞれの文化を作っているというわけ。そんなことを考えな
がら、この旅の楽しかったことを思い出し、懐かしいネブラスカの匂いがして
きたことを知る。

こうして、無事、リンカーンに戻ってきました。

この日の行程

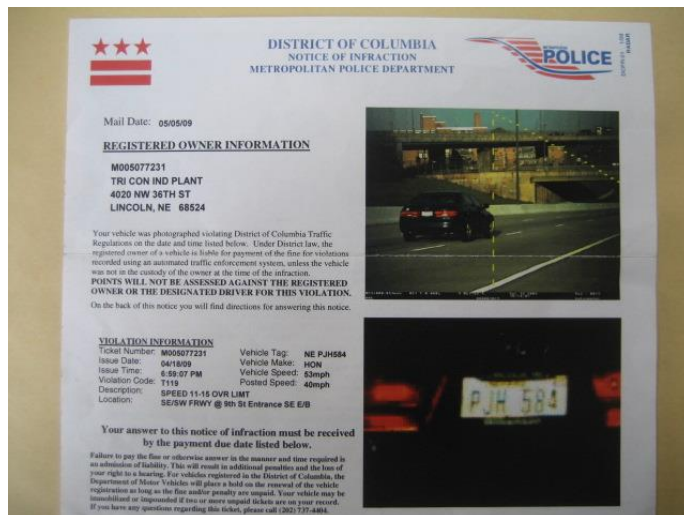
Springfield --→ Hannibal ----→ Macon -→ Chillicothe ---→
Cameron ---→

ST. Joseph -----> Nebraska City --→ Lincoln

走行距離は、444 マイルでした。

番外編

今回のドライブ旅行では、途中でクレジットカードが使えなくなったり、予約したつもりのホテルが、実は予約できていなかったり、挙句の果ては、予約したホテルの所在地が、実は別の州の同じ名前の市であったり、こんなハプニングはあったが、スピード違反のパトカーにも捕まらず、まあ、これだけ運転も余裕ができたのかと大満足で、仕事に復帰した。ところが、数日たって、会社に変なところからメールがはいり、会社の車がワシントン DC でスピード違反をした。証拠写真があり、違反した車の写真もばっちり。これは、いったい誰だということで大騒ぎになった。手紙は、スピード違反の罰金を払えというもの。そして、車のプレートナンバーから、このくるまが私のものだということが分かった。「えっ、そんな馬鹿な。」思ったが、確かに写っている写真は私のもの。しかも、ネブラスカの車と車のナンバーからこれは間違いない。スピード違反は、制限速度が 40 マイルのところを、53 マイルとなっている。場所は、片側数車線もあり、インターステーツへの入り口となっている。道路の状況がほとんど他の車の陰が写っていないのでガラ空き状態。なんで、こんなところが制限速度 40 マイルなんだ。ネブラスカでは、40 マイルなんていうのは、ダウンタウンに入る道くらいしかない。そう思っても、これは、いたし方のな



これが恨みの証拠写真つき罰金請求書
文句があるなら、言っといで!と書いてある。
“ やられた ”

いところ。納得はいかなくても、これは罰金を支払わなくては行けない。ということで、今回は、完全に脱帽の状態。それにしても、制限速度 40 マイルなんていうのも信じられないし、ちゃっかり写真を撮り、しかも、後ろからだから、前の車のスピードについていったなんていうのは、まさしくしてやられたという思い。これは言い訳にはならないが、まあ、アメリカではこんなスピード違反の取締りもあるか、50 ドルはちと高いが、この写

真もアメリカドライブのいい記念だ、というわけで観念した次第。その写真をお楽しみください。

この十一日間の走りまくり、East (好人) 尋ねて PEI までの旅は、合計 5,456 miles になりました。この距離は、丁度アメリカ大陸をほぼ東西に横断する距離。まあ、実によく走りました。とにかく、大西洋を拝むことができたし、赤毛のアン的舞台となったプリンス・エドワード島にも行くことができたし、これでアメリカ大陸の 48 州のうちの 47 州を走破するという実績もできました。この旅のコースは、次のようなものでした。

なんて、気まぐれな奴だと思いでしょが、この世の中、右も左も、そして、天も地も大きな規則で回っているのですが、誰もそれに気づかず、世の中気まぐれと思いでではござんせんか。気まぐれな奴ほど、新しい発見があるものでございます。



これが、5,456 miles の行程